《现代汉语词典》第六版 閲読箚記

田 忠 魁

要旨　本稿では、主に《现代汉语词典》における漢字や見出し語の収録と品詞の決め方について論議している。まず、親文字（項目としての単漢字）の収録の得失、削除してもよい漢字と補足してほしい漢字、部首用漢字の扱いの不徹底さなどを指摘し、筆者の提案を示した。また、見出し語（漢字 2 字以上の項目）収録の体系性を論じ、特に《现代汉语词典》の実用性から、項目の増補案を提示した。それから、品詞明記の不徹底さと、わずかながら若干の品詞判定についての異見を提出した。

キーワード　辞典　親文字　項目立て　品詞　見出し

提要　本文重点讨论了《现代汉语词典》中汉字・复音词收录、以及词类的判定问题。首先，指出了词典在收字方面的得失，应该删除的汉字、建议补入的汉字，还谈到用作部首的汉字处理得不够彻底，同时提出笔者的处理建议。其次，讨论了复音词收录的体系性，还从实用的角度提示了希望增补的复音词。最后，指出词典在词类标示方面的不系统、不彻底性，同时还提出了关于若干个词的词类判定的不同意见。

关键词　词典　收字　立目　词类　词目

世には辞典というものが多く出ているが、中国では《现代汉语词典》第 6 版（以下《现汉》と略す）が、同類の辞典の中で、最も多くの読者を擁している。この事実は、《现汉》が一般読者から最も高く評価されていることを物語っている。なぜなら、読者こそが辞典を評価する資格がある、と考えら

れるからである。

辞典、特に国語辞典の良し悪しを評価する場合、その基準となる点は多くあるが、中でも、収録語数（見出しの数）が充分であるかどうか、収録語句の読み方が規範に合うかどうか、見出しについての解説が要を得て、しかも十全であるかどうか、意味の分類が適切かどうか、用例が最小限の要求を満たし、語釈に完全に合致しているかどうか、などが特に重要である。

以前から《现汉》を使ってきたが、改訂のあるたびに、全面的な質の向上を感じている。特に第 5 版、第 6 版は進境著しいものがある。最新の第 6 版は、漢字索引（检字表）から付録まで、収載漢字を600余り増加し、漢字 2 字以上からなる多音節の見出し語を3000余り追加して、全体にわたる大掛かりな改訂を行った。ある意味で、こうした増補は読者の拡大にもつながるであろう。

もっとも、時代が前進の足を止めることがないように、言語の発展も終わりはなく、辞典の改訂も、それにあわせて続いていくだろうことは言うまでもない。

第 6 版もしかりで、まだ見直す余地があるのではないか、というのが使用してみての実感である。そこで所見と異見を編著者に呈し、いささかでも再訂の参考になれば、望外の喜びである。

まず断っておくべきことは、これから述べる所見や異見といっても、この辞典を丹念に通読した上での、系統立った全面的な批評や指摘をしたものではない、ということである。

《现汉》を引き、語句を調べているときに生じた疑問点、つまり漢字の収録、項目の立て方、音表記（中国語では“读音・注音”）や語釈の是非について、私見を述べているに過ぎない。したがって、親文字・単語・音表記・意義などは、ただ例を挙げただけにとどまっている。

1．親文字と見出し語の収録

1.1　削除していい漢字

(1)　瑷珲（p. 6，p. 576）

注：地名として“爱辉”に取って代わられた。

繁体字“瑷琿”は《汉语大字典》[1]（以下《大字典》と略す）p. 1128に収録。ただし、“珲”は hún と読む場合、別の地名に用いられるため、残すべきである。

(2)　嗊吓（p. 115，p. 458）

注：“贡布”に取って代わられた。

繁体字“嗊吓”は《大字典》p. 664に収録。

(3)　盩厔（p. 1678，p. 1694）

注：“周至”に取って代わられた。

地名としては《説文解字》（以下《説文》と略す）巻十に収録。音義は《大字典》p. 2571に収録。

(4)　峇（p. 18）厘

注：“巴厘”に取って代わられた。

“峇 bā”の音は意味不明だが、《大字典》p. 771に収録。

一般読者にとっては、ほとんど意味のない、廃止された漢字と見出し語は削除すべきであろう。統計はとっていないが、これらの漢字は、《现汉》を利用する読者が必要としていないものではないかと思われる。

辞典の項目収載容量が決まっているなら、それらの、廃止された親文字にスペースを割くより、もっと常用度の高いものに取り替えたほうが辞典の収載効率がいいし、読者の検索にも有利なのではないだろうか。

おそらく、カンボジアの古い表記の地名“嗊吓 gòngbù”（カンポート）を収録した理由は、他に出る幕のない、この2字の読みが気になってのことかもしれないが、すでに現代中国語から消滅し、一般読者に検索される機会も

1）《汉语大字典》徐中舒主編、湖北辞書出版社、四川辞書出版社、1990年第1版。

ごく稀な地名のために、むだなスペースをとる必要はないと考えられる。

同様に“瑗珲”“盩厔”“峇”なども、削除すべきであろう。研究者など特別な読者は、《大字典》や専門辞典を調べればすむことである。

1.2　修正の必要な日本製漢字の解説

(1)　畑、畠 tián (p. 1289)　“日本汉字，旱地。多用于日本人姓名（日本の漢字、ハタケの義。日本人の姓名に多用される)。”

注：この 2 字は、遅くても第 3 版からあり、語釈も旧態依然としている。実際は、姓に使われても、名のほうに用いられることはほとんどない。したがって“多用于日本人姓名”を“亦用于日本人姓氏（日本人の苗字にも用いられる)”と修正すれば事実に合う。

なお、日本語の発音をローマ字で hata(ke) と明記しておけば、この漢字の発音を中国語と同じ tián とする中国人の思い込みや誤解は避けられるだろう。

“日本汉字（日本製漢字)”という記載は1947年中華書局の旧版《辞海》と同じだが、《现汉》には、すべての日本製漢字について、この記載があるわけではない。少なくとも次の漢字には“日本汉字”と明記すべきである。

(2)　膵（脺）cuì (p. 224)

注：編者の誤解からかもしれないが、その「異体字」とされる“脺”は、全く別字なので、削除すべきである。

“脺”は、《説文》には見あたらない。《康熙字典》(以下《康熙》と略す) では、“肉”の部で《集韵》を引用して「脆の本字」としている。1914年商務印書館第 5 版の《新字典》(陸爾奎編纂主任) 未集 p. 43“膵”の項で“日本所製字。……西名 Pancreas（日本製漢字。(中略) 洋語では Pancreas)”[2] と出ているが、“脺”は収録していない。旧版《辞海》にも“脺”の漢字はなく、“膵”(p. 1104) の項には“日本字，讀如萃（日本製漢字、cuì と読む)”という注釈がある。つまり、“脺”は、異体字を積極的に収載する《集韻》

2)《新字典》陸爾奎編纂、商務印書館、1914年第 5 版による。第 1 版は1912年。

以外にはほとんど見つからないからその出自が疑わしい。

実際、この“膵”は、宇田川榛斎（名、玄真。1769–1834）が考案し、1805年の『西説医範提綱釈義』[3]という著書で使用したものであるため、“日本汉字，音 sui”と補注をつけておくべきだろう。

(3)　鱇 kāng (p. 727)　见 9 页【鮟鱇】（9 ページ“鮟鱇”の項を見よ）

注：この字は《説文》から《康熙》までの辞典や他の古文献にはないし、古語辞典《辞源》（商務印書館、1979–1983改訂版）にも、もちろん収録されていない。旧版《辞海》p. 1531は日本製漢字として収録している。《现汉》で、ローマ字音 kou の注をつけてほしい。

(4)　搾 zhà (p. 1632)

注：絞る義の「榨①」の異体字とされているので括弧入りだが、《康熙》《辞源》などに収録しないのは古文献に見ないからである。中国で通用しない文字である以上、削除すべきだと考える。残すのなら、日本製漢字、ローマ字音 saku の注をつけてほしい。

(5)　腺 xiàn (p. 1418)

注：《康熙》《辞源》などに収録しないし、《大字典》p. 2097でも、反切音と出自の記載がない。

この字も、やはり宇田川榛斎が、形声と会意の方法で考案し『西説医範提綱釈義』で使用したものである。ローマ字音 sen の注をつけてほしい。

(6)　鱈 xuě (p. 1481)

注：《説文》《康熙》《辞源》などの辞典や他の古文献に見ない。《大字典》p. 4710でも反切音と出自の提示がない。この魚が冷たい海域、しかも雪の多い冬に大漁となるため、「鱈」の字が作られた（加納喜光『動物の漢字語源辞典』[4]p. 229、吉田金彦『語源辞典 動物編』[5]p. 155参照）。

この魚は、中国語では本来“鱉 mǐn”といっていたが、近代以来“大头鱼”

3）『精選版日本国語大辞典』小学館、2006年初版「膵」の項を参照。
4）加納喜光『動物の漢字語源辞典』東京堂出版、2007年初版。
5）吉田金彦『語源辞典 動物編』東京堂出版、2002年再版。

“大口鱼”、また、中国の東北あたりでは朝鮮語を借用して“明太鱼”ともいう。ローマ字音 tara の注をつけてほしい。

1.3　補足すべき漢字と日本製漢字

(1)　梶 wěi,　梢（こずえ）

注：《集韵》に収録。日本製漢字ではないが、日本人の姓氏には、「梶」で始まるものが79（読み方は107）、終わるものが27もあるため、追加してもよかろう[6)]。

(2)　込 rù

注：日本製漢字、komu・komi・gomu・gomi などと発音する。日本の姓氏でこの字が使われるものは43（読み方79）ある[7)]。

(3)　辻 shí

注：日本製漢字、tsuji と発音する。日本の姓氏でこの字が使われるものは215をくだらない[8)]。

(4)　麿 málǔ

注：麻呂の 2 字を、日本人が組み合わせたもの。maro と発音。日本の男子名専用漢字。日本の大型国語辞典にこの字を使う歴史的有名人は15をくだらない[9)]。

1.4　異体字

噪（p. 1626）　虫或鸟叫（虫か鳥が鳴く）

注：“臮”は“噪”の本字であるが、この“噪”の簡体字として古字“臮”

6）『苗字 8 万よみかた辞典』（北京大学出版社、1999年）を参照。

7）同上。

8）同上。

9）『精選版日本国語大辞典』には石黒宗麿（1893–1968）、石塚龍麿（1764–1823）、多自然麿（?–886）、喜田川歌麿（1753–1806）、清麿（1813–1854）、近衛篤麿（1863–1904）、近衛秀麿（1898–1973）、近衛文麿（1891–1945）、斉藤彦麿（1768–1854）、千家元麿（1888–1948）、田中阿歌麿（1869–1944）、田中不二麿（1845–1909）、谷才麿（1656–1738）、土岐善麿（1885–1980）、夏目甕麿（1773–1822）などが見られる。

を復活させる可能性はないとは限らない（実際、“従”→“从”などのような復古の例もある）。異体字として“喿”を収録しておいたほうが望ましい。

ついでに触れておくが、《现汉》と同規模の辞典《应用汉语词典》[10]（以下《应汉》）や《现代汉语规范词典》[11]（以下《规范》）などにも、異体字“喿”は収録されていない。

1.5　部首用漢字

現代語文には現れないが、部首として用いられる、例えば“厶 sī”（p. 1227）、“彳 chì”（p. 176）、“辶 chuò”（p. 211。部首とする場合は“辶”）といった漢字が、《现汉》で一字として収録され、発音や意味が付されている。部首を指す上での利点は明らかである。

しかし《现汉》では、次のような部首用文字が収録されておらず、徹底したものになっていないので、辞典の体裁上補足したほうがよかろう。

丨 gǔn：上下に貫通する。

丿 piě：右上から左下への字画。

丶 zhǔ：主の本字。後に句読点として借用。

匚 fāng：方形の器。

冂 jiōng：集落から遠く離れた場所。坰（p692）の本字。

勹 bāo：包の本字。

亠 tóu：部首の名称のみ、意義なし。

冫 bīng：冰の本字。

冖 mì：冪の本字。

凵 kǎn：地面にできた穴。窪み。

卩 jié：符節。

廴 yǐn：長く伸ばす。

艹 cǎo：草の本字。

10）《应用汉语词典》郭良夫主編、商務印書館、2000年第1版。

11）《现代汉语规范词典》李行健主編、外語教学与研究出版社、2010年第2版。

廾 gǒng：両手で物を持つ。

彡 shān：毛でできている装飾物。

夂 zhǐ：遅く到着。

宀 mián：ホールも部屋もある建物。

彑、彐 jì：豚の頭。

屮 chè：草が芽生えた様子。

巛 chuān：川の本字。

旡 jì：食後のげっぷ。

攵、攴 pū：軽く叩く。

疒 chuáng：病気。

癶 bō：蟹股の歩き方。

襾 yà：覆う。

虍 hū：虎の体の紋様。

髟 biāo：長髪が垂れ下がる様子。

もちろん、上に挙げた部首文字は現代語では使われていないので、紙幅の関係で、収録されなくても不都合は生じない。ただ、その場合は、辞典の体裁からも、現在すでに収録されている“厶”“彳”“辶”などは削除すべきであろう。

1.6　見出しの体系性

今回の《现汉》改訂で、漏れた語の補足や、多くの新しい語の追加がなされた。例えば、第 3 版にはあった「甲部」が、どういうわけか第 5 版にはなかったが、今回の改定で「甲部」が呼び戻されて、「乙部」「丙部」「丁部」と四部が揃うことになった。

また、第 5 版までは欠けていた“假发（かつら）”を補い、“假牙（義歯）”“假肢（義肢）”一組を成し、“低速”を添えて、“高速”とペアを組ませ、最小語群を完成させた。

ただ、こうした見出しの体系性は、いまだ十分ではない。例えば“列车员”（p. 817）はあるが、“列车长”は収録されていない。また、ペアで使わ

れる“活血（p. 589）”と“化瘀”は、片方しかない。

最も不思議なのは“船长”（p. 202）や“外长”（p. 1337。もとになる“外交部长”が収録されていないのも、体裁上、不自然であるが）が収録されているのに、例えば“机长”“财长”ほか、数多くの“…长”が除外されていることである。

もし“…长”が多すぎて収録しきれないのなら、辞典の体裁を考慮して、現に収録しているすべての“…长”を削除すべきかと思う。

しかし、例えば“班长”という語は、学級のリーダー、作業班・炊事班・分隊の長、グループの筆頭責任者などを指し、かなり広範囲に用いられ、収録されている“船长”と“外长”より、はるかに使用頻度と重要性は高いと考えられる。

実用と規範を標榜する辞典としてはこのような十分に熟した、まとまった語群の単語をできる限り網羅した方が、読者特に外国の読者の語義調べなどに便利で、助けになるし、辞典の語彙収録の系統性もその分よくなるだろう。

世界三大宗教の創始者の中で、“耶稣”（p. 1517）（p. 601で“基督”も）だけが収録されていて、仏教の“释迦牟尼”も、イスラム教の“穆罕默德”も、見出し語にはない。ニュートラルな立場に立つべき辞典としては、公平に扱うべきであろう。

もう一つ理解に苦しむことは、訳の分からない“李逵”（p. 794）が収録されていることである。性格の粗野、粗暴の典型では“张飞”などもいるし、忠義の面では“关羽”や“鲁智深”は“李逵”に劣らない。民間での知名度では“岳飞”が上かもしれない。しかるに“李逵”のみを収録するのは何故なのか。

“阿Q”（p. 1）、“马大哈”（p. 862）、“诸葛亮”（p. 1697）などは、一般語化しているので、見出し語となって当然であろう。しかし、使用頻度と重要性で、はるかに劣る“李逵”レベルの語まで含めてしまうと、《现汉》の語彙数は、かなりの量になるのではないだろうか。

1.7　削除すべき見出し

(1)　煲电话粥（p. 43）〈方〉指长时间地通过电话聊天儿。（ぺちゃくちゃしゃべる長電話）

注：広東方言からきた俗語的表現。筆者は広東の大学の教師と学生を対象にアンケートをとったところ、普段この言い方を耳にすることが少ないと答えたのが160人中85％の136人、よく耳にすると答えたのは、15％の24人という結果だった。

いわば「原産地」の広東でさえ、使用者は少数派でしかない。上海、武漢、山西省、天津、黒龍江省、山東省出身の教師たちにも尋ねたが、「よく耳にする」と答えたのは、ごく稀である。

“煲电话粥”という表現は、標準語の中では目新しいだけで、特に使用の奨励には値するものではない。新しく現れた事物は、すなわち進んだもの、よいものと考えたのは、もう昔のことである。新しくありさえすれば、それでよいというのは認識上の誤りに過ぎない。

かつて“张、王、李等三同志”や“打扫卫生”などは、誤用と見なされたが、現在では普通に使われている。したがって、この“煲电话粥”も将来、全国で大流行するかもしれない。たとえそうだとしても、規範性を持って自認する辞典がこんな言い方の使用に力を貸すべきではない。万一全国的に普及するようなことが起これば、その時点で収録すればよい。現段階で辞典を無駄に厚くする必要はない。

ちなみに、《应汉》《规范》などは収録していないが、その慎重な態度が望ましい。

(2)　和文（p. 525）日本文（日本文）

注：《现汉》には“英文”“俄文”“法文”“阿拉伯文”“韩文（朝鲜文）”“越南文”などが収録されていないにもかかわらず、“和文”だけが見出し語になっているのは理解に苦しむ。

しかも“和文”に付された“日本文”という語釈の意味も定かではない。もし『源氏物語』『蜻蛉日記』など、仮名で書き記した仮名文（飛田良文2008）を指すのなら、まったく収録する理由はない。ついでに“日本文

rìběnwén”なるものは、中国語にはなじまないもので、「日本語の文章」の意味なら、“日文 rìwén”というのが普通。

(3)　颠沛（p. 290）・流离（p. 832）

注：現代語ではどちらも単独で使う例はほとんど見つからないため、語ではなく形態素（語素）とした方が無難だろう。形態素といっても、語構成能力が非常に弱い。

“颠沛”は成語“颠沛流离”の一つしか作れないし、“流离”は成語“流离失所”と“流离转徙”と“颠沛流离”の三つしか作れない。この二つがそれぞれ“颠沛流离”“流离失所”と並立させているのは辞典の内容量を無益に増大させているばかりで、見出し収録効率からは望ましくない。

また、《现汉》は“颠沛”と“流离”を動詞としているが、助詞“着・了・过”が付かないし、副詞“没・不”で否定することもないから、動詞として認められにくい。したがって、どちらも見出し語から削除し、用例とされている“流离转徙”も入れて、三つの成語を見出し語にすれば、中国語の実際に合致するのではないだろうか。

(4)　绍介（p. 1145）

注：日本では、現代でも普通に使われている（「紹介」と表記）が、中国では《战国策・赵策三》（前汉　刘向编）が最も早い文献であろう。五四以来の使用について、李霽野宛ての魯迅書簡を各辞典で引用しているようだが、実際のところ、1925年2月27日の李霽野宛ての書簡では“介绍”を使っている。これ以後“绍介”は、死語となっている。読者のことを考えるのなら、余計な語に紙幅を使わず、使用頻度の高い語彙を収めるべきである。

1.8　項目立て

(1)　家教（p. 621）　①家长对子弟进行的关于道德、礼节的教育（親の子供に対して行う道徳や礼儀方面の教育）：有～｜没～。②家庭教师的简称（家庭教師の略称）：请～。

注：①と②は、一つの見出し語の中に収められているが、意味や由来が全く無関係で、あきらかに同音異義語である。①は“家庭教育”の略。②は語

釈の通り。《现汉》の凡例1.2(b) に則って、ここは【家教[1]】、【家教[2]】とするべきである。

(2)　草鸡（p. 129）　①……②……③〈方〉形软弱或胆小畏缩（意気地がない。臆病で引っ込み思案だ）。

注：語釈③は、①②と関連があるにせよ、すでに品詞も形容詞となって、①②からは独立している。【花[1]】（p. 552）→【花[2]】（p. 553）の処理の仕方に倣って、①②とは別に【草鸡[2]】とするべきである。言うまでもなく①②は【草鸡[1]】である。

(3)　调理（p. 1292）动①……。②……。③……。④〈方〉戏弄（［人を］馬鹿にしたりなぶったりする。［人を］愚弄する）。

注：語釈④は、北方では“tiáoli”と第 2 音節を軽声[12)]（第 3 声とする辞典が多いが）にするし、また“诓骗”（欺く、誑かす）という意味もあり、これを独立させて【调理[2]】とすべきである。もちろん前の語釈①②③は【调理[1]】とする。

(4)　語釈のつく見出し語と、ついていない参照見出し語は、辞典の体裁上、使用頻度によって決定されるのが原則であろう。このほうが読者も納得がいく。

次の 3 組の見出し語は、使用頻度優先の原則にしたがって、置き換えるべきである。

六弦琴（p. 835）→吉他（p. 604）

龙船（p. 836）→龙舟（p. 837）

落花生（p. 858）→花生（p. 555）

置き換えてから、語釈の調整が必要である。例えば“花生”の語釈のあとに、旧称“落花生”と補注を加えるなど。

---

12)《哈尔滨方言词典》李栄主編、江蘇教育出版社、1997年第 1 版。
《东北方言口语词汇例释》王樹声主編、黒龍江人民出版社、1996年第 1 版。

1.9　追加すべき見出し語

《现汉》の“第6版说明”は、新しい語句を3000近く追加して6万9000語になったという。この語彙数は、7万2000語収録の《规范》第2版より少ない。読者のためには、使用頻度の高い、次のような語句を増やすべきではないかと考えられる。

（凡例：「・○」は軽声、「～○」は接尾辞、「○～」は接頭辞）

（コメント）

白给（口語で常用）
白煮（調理で常用。趙元任1968, p. 681は一語としている）
半旗（常用よりも重要。《应汉》《规范》は欠如、《现代汉语大词典》所収）
半袖儿（“半袖衫儿”の略称。常用）
半袖衫儿（“半袖儿”と略称。常用）
班长（1.6を参照）
被害（“被害人”“遇害”を収録。《规范》所収）
不备（《应汉》《规范》所収）
不孚众望（《应汉》《规范》所収）
不負众望（《应汉》《规范》所収）
～不唧（的）（口語常用。他辞典でも欠如）
不几～（“～大几”より常用。語構成能力が強い）
・不了（重要な助動詞、詳解すべし。“了”は liǎo）
不容分说（常用。《规范》所収）
不是东・西（口語で常用）
不由分說（常用。《规范》所収）
部长（1.6を参照）
不着调（口語で常用）
彩钢（物も語もよく見かける）
财长（1.6を参照）
参谋长（1.6を参照）
茶垢（p. 136“茶锈”の同義語だが、常用）
厂长（1.6を参照）
常驻（常用。《规范》所収）
吃穿（《应汉》《规范》所収）
吃・喝儿（北方方言から。《应汉》《规范》所収）
村长（1.6を参照）
大快朵颐（近年来常用。p. 336“朵颐”は単独で現代語に使われない）
大实话（北方方言から。《规范》所収）
・得・慌（助詞。口語で常用。“慌”・heng）
・得过儿（助詞。口語で常用）
・得了（重要な助動詞。“了”は liǎo。形容詞“得了 déliǎo”とは別語）
吊柜（儿）（《规范》所収）
东亚病夫（侮辱的呼称だが、単語として常用よりも重要）
短袖儿（“半袖儿”とも。常用。《规范》所収2）
队长（1.6を参照）
放水（広東方言から。すでに常用）
防长（“国防部长”の略称。1.6を参照）
粉底霜（foundation 巧みな音訳語。常

用）
各路（口語で常用。“各”gé の発音に注意）
胳肢窝（口語で常用）
工长（1.6を参照）
股长（1.6を参照）
馆员（職名、常用）
馆长（1.6を参照）
行长（1.6を参照）
浣熊（テレビによって周知。《规范》所収）
会长（1.6を参照）
江沿儿（“河沿”を収録。ただし、“沿儿”は yánr と第 2 声）
舰长（1.6を参照）
角铁（p. 1117“三角铁”の略称、p. 651“角钢”の通称）
槟如树（p. 1511“腰果”の木。“槟如”は音訳）
鸡蛋果（儿）（時計草科、台湾福建広東海南などで栽培。果物が卵の形になり、味もやや茹で卵に似ているからいう）
寄居蟹（“寄居虾”とも。広く知られている。《规范》所収）
结垢（p. 461“垢”が語ではないから。《规范》所収）
街口儿（常用。《规范》所収）
节译（p. 661“节录”と p. 1633“摘译”を収録。《规范》所収）
景教（文化、歴史的意義から）
金牙（特に小説などによく現れる）
机长（1.6を参照）
卷面（教育の場で常用。“卷”juàn）
绝景（古語からだが常用。《规范》所収）
军长（1.6を参照）
巨型（大／中／小型は収録。《规范》所収）
局长（1.6を参照）
康乐球（“克郎棋”“克郎球”などとも。《应汉》《规范》所収）
抗日（“抗击日本”の略称。常用）
考拉（テレビによって知れ渡ったものの、ほとんどの辞典に収録されていない）
克郎球（“康乐球”を参照）
科长（1.6を参照）
狂话（常用。《规范》所収）
狂欢节（文化的意義も。常用。p. 756“狂欢”の用例から独立させるべし。《规范》所収）
矿长（1.6を参照）
蜡炬（“蜡烛”の同義語だが、李商隠の詩で知れ渡っている。《规范》所収）
老人儿（北方方言から。“老人”とは別語）
两说着（口語で常用）
亮子（p. 369“房子”項の図にも追加すべし）
连长（1.6を参照）
离散的（言語学用語だが）
轮机长（1.6を参照）
旅长（1.6を参照）
慢慢儿的（口語で常用。普通、mài-mānrde と発音）
满清（近代以来常用）

曼荼罗（宗教重要語）
毛・毛（儿）（魯迅の作品にもある日常使う語）
毛贼（“蟊贼”とは別語）
美得你（慣用連語、口語で常用）
闷酒（常用）
苗（春の p. 1238“蒐”、秋の p. 1412“狝”、冬の p. 1201“狩”があるのに夏の“苗”だけがないとは体裁上まずい）
模版（近年使われ始めたが、常用）
磨刀石（日常使用のもの）
磨石（“磨刀石”の略称）
没药（“没”は音訳。《应汉》所収）
穆罕默德（p. 601“基督”と p. 1517“耶稣”を収録。《应汉》所収）
闹（親文字“闹”の語釈の補足：「望ましくない結果になる」。“落”の音変化か）
牛仔（p. 954“牛仔裤”などは収録）
泥醉（古語からだが、現代でも使う。《应汉》所収）
排长（1.6を参照）
平常心（語として充分熟している。常用）
凭什么（きつい詰問に用いられる点で“为什么”と区別される）
球・球蛋蛋（儿）（北方方言からだが、口頭で常用）
区长（1.6を参照）
热络（新しい常用語）
蝶螺（食卓にも上るもの）
乳香（よく“没药”とペアで使う。《应汉》所収）
三界（宗教でも常識程度の語）
山竹（よく見かける果物）
省长（1.6を参照）
社长（1.6を参照）
时不常（口語で常用）
释迦牟尼（“耶稣”も“基督”も収録。《应汉》《规范》所収）
士敏土（《应汉》所収）
石炭（《应汉》《规范》所収）
师长[2]（1.6を参照。p. 1172既有のものを“师长[1]”にして区別）
市长（1.6を参照）
瘦肉精（知れ渡っているもの）
水门汀（“士敏土”とも。《应汉》所収）
司务长（1.6を参照）
司长（1.6を参照）
所长（1.6を参照）
天街（韓愈の詩句「天街小雨润如酥」で知れ渡っている）
天塌地陷（慣用連語。《应汉》《规范》所収）
厅长（1.6を参照）
庭长（1.6を参照）
团长（1.6を参照）
婉曲（《应汉》所収）
万圣节（宗教よりも文化的意義がある。《应汉》所収）
威化饼（wafer の広東方言音訳から。市場に出回っている）
委员长（1.6を参照）
乡长（1.6を参照）
县长（1.6を参照）
校长（1.6を参照）
鞋鱼子（実際使われるもの）

洗浴（“洗澡”の新しい表現、自宅では使わない。文革後復活させた古語。《应汉》《规范》所収）
薫衣草（広く知れ渡っているもの）
扬名立万（時代小説で現れる）
严加（常用。《规范》所収）
页脚（パソコンで常用）
页眉（パソコンで常用）
一览无余（《应汉》《规范》所収）
营长（1.6を参照）
有……头（常用の文法構造）
院长（1.6を参照）
～与否（文章語でかなり常用）
愚人节（若者の間で広まっている）
藏獒（近年広まった犬種）
站长（1.6を参照）
～者流（常用）
震旦（中国の別称。歴史的、文化的に重要）
侦听（常用ではないが重要語。《规范》所収）
镇长（1.6を参照）
支那（常用ではないが重要語。《规范》などで、日本人が使い始めたと誤解している）
周知（《规范》所収）
钻天杨（よく見かける木。《规范》所収）
组长（1.6を参照）

2．品詞について

2.1　品詞明記の徹底化

辞典で所収単語に対する品詞の記載は、中国語の場合、語の認定に関わる複雑な問題であるため、《现汉》がこの面で大変な苦労をしたと想像される。

しかし、努力は続けなければならないものである。連語を単語と誤認することを避けるためなのか、一部の複音語の品詞記載を欠いている。

连锁店（p. 804）名
连锁反应（p. 804）

注：構造から見て、上の 2 語は全く同じだが、一方は単語、一方は連語と扱われている。根拠は、後者が前者より 1 音節多いだけだと考えられる。もし後者を連語と認定したのなら辞典に収録すべきではない。一つの語と熟していない連語は収録し切れないほど多いからである。およそ、“打伞”や“上个月”などのような自由結合の連語を収録する辞典はどこにもない。この“连锁反应”は“连锁的反应”などと拡張できない、立派に一語と熟した

のだから単語と認定して、さらに文法機能から名詞として品詞記載をするのは当然だろう。ちなみに、《应汉》p. 781では名詞と記載していることは参考になる。

2.2　一部の代名詞についての異見

《现汉》は次の語を代名詞と扱っている。

P333，P334：多⑥、多・么①

P927：哪⑤

P928：那・么、那样（どうしてか“那么样”は収録していない）、那・么・着

P1617：咋（“怎、怎么”などの口語形）

P1628：怎、怎・的、怎・么、怎・么样、怎・么・着、怎样

P1650：这・么、这・么样、这・么・着、这样

注：上の語を全部代名詞と分類しているのは学界の主流的認識だとは筆者も知っているし、そうするのはそれなりの理屈があると認めないこともない。しかし、説明しきれない既存の問題は依然残っている。それらの語を代名詞としてしまうと、連用修飾語（中国語では“状语”）を代名詞でも担うことを認めなければならなくなる。しかし、連用修飾語の働きは主に、“体词（ほぼ日本語の体言）”ではなく副詞と形容詞で果たしている。

代名詞が“体词”の一つで、その文法的働きは主語・目的語・連体修飾語になることであり、前述のそれらの語は普通これらの働きを果たさない。“我哪能比得上他呢！（私なんかどうしてあの人に及ぶものでしょうか）”“你怎么看这个问题（このことについて君はどう思うか）”などの使い方は疑いもなく連用修飾語である。前述の語群は趙元任（1968）が副詞に分類しているのは文法的にまったく正しく、論理的に納得がいく。それなのにその説を無視するのは理解できない。

同類の語はもう一つある。

p. 1358：为何　副
　　为什么

注：連語としているからか、“为什么”に品詞の記載はない。先の語群の扱い方から類推すると、やはり代名詞的なものになるだろう。しかし趙元任に従えば副詞と分類する方がいいだろう。文章語的だが、同じ機能、同じ意味の“为何”p. 1358が副詞に分類されているから、一語として充分熟しているはずの“为什么”も副詞にしなければ具合が悪い。また代名詞も兼ねているのはいうまでもない。品詞を兼ねるものは中国語では珍しくはない。また、《应汉》p. 1309、《规范》p. 1368が副詞と代名詞に分けて品詞を明記しているのは参考にすべきだと思う。

2.3　いくつかの語の品詞についての異見

(1)　彩色（p. 121）名　多种颜色（複数種類の色）

注：“彩色照片（単一の色でない、すなわち複数の色がある写真）”の用例からもわかるように、複数の色があるというのは状態性の言葉つまり形容詞と考えられる。文法機能としては主語にも目的語にもならない連体修飾語にのみなる。また、“现在的电视都是彩色的”の“彩色的”は名詞相当のもの（＝彩色电视机）になるのも形容詞の特徴である。というわけで、形容詞の中の“属性词”と判定しうる。ちなみに《规范》p. 119では、《现汉》の“属性词”と対応する品詞“区别词”としている。

品詞を変えると、語釈も“有多种颜色（的）”と改めなければならない。

(2)　任何（p. 1096）代　无论什么（何でも）

注：“何”が代名詞だというのは、主語にも目的語にもなる（主に文語の場合）からである。しかし“任何”の文法機能は全く違っていて、そのどちらにもならない。それは連体修飾語にだけなるからやはり“属性词”としかいえない。

語釈のほうも、“表示全面概括。所有（的）”と改めた方が適切であろう。

(3)　大几（p. 241）数

注：数詞は“体词”だから、名詞と同じ機能を有するはずだ。しかしこの“大几”はそういう機能を持っていないばかりか、20、30など整数の年齢を表わす語の後につけてからでないと、そのまま単独ではいかなる文成分にも

なりえない。しかも、意味の面でも“超过这个整数年龄（その整数の年齢を越す）”と副次的な意味を添えるため、語よりも一つ小さい単位の形態素として扱わなければならない。

(4)　德行 dé·xing (p. 272) 名　讽刺人的话（人をけなす言葉），……

注：“那小子才德行呢！（あのやつのざまの浅ましいこと）”などの使い方はもっとも普通であるし、“真德行！（実に下劣だ）”のように程度副詞の修飾を受けるため形容詞だと分かる。傅民、高艾軍（1986）に述語となる用例があるほかに、斉如山（1991）：“意思就是没有好德行（立派な徳性がない）”で、この語が形容詞だということになる。また、徐世栄（1990）は形容詞だとはっきり言っている。だから、名詞のほかに形容詞の品詞記載も補うべきである。ついでに、語釈の“讽刺人的话，……”を“表示对某人仪容不堪，言行举止低俗恶劣的蔑视（厌恶）态度（人の容貌がいやらしく、立ち居振る舞いが浅ましくて憎悪・軽蔑する気持ちを表わす）”に改めるといいと思う。こまごまと煩雑のそしりは免れないかもしれないが、外国の読者には正確に理解してもらえ、親切だろう。

(5)　的（p. 278）名

注：“的士”の略称としているようであるが、単独で使うことができないから形態素とすべきである。もちろん“打的”（p. 233）は“读书”と同じ“述宾（述語＋目的語）”構造だが、前者が一語の動詞で、後者は一語の動詞ではなく連語である。

(6)　喋喋（p. 302）形

注：古語では単独で使われる（それも形容詞ではなく動詞として）が、現代語では用例が極稀で、柔石の短編小説《为奴隶的母亲》以外、ほとんど見つからない。柔石の用例も現在の中国人からは奇異に感じる。そのためかもしれないが、《现汉》はあえてそれを用例には出していない。形容詞とされるこの“喋喋”はもちろん“可”や“很”など程度副詞の修飾を受けないし、“不”や“非”で否定することもないし、“着・了・过”の後続もできない。そして、連体修飾語・述語・連用修飾語にもなりえない。使い方としても、言語化石の姿で“喋喋不休”に含まれる以外に出る場がない。つまり、

現代語では一語だとは認められないのである。語構成能力の極弱い形態素なので、《应汉》p. 281のように、“喋喋不休”の成語で見出しとしたほうがよほど辞典の効率がいいのではないだろうか。

(7)　旷世（p. 757）㊀

注：中国語では、動詞と形容詞は文法機能がほとんど同じだから識別しにくい。広い意味の形態や重ね型が異なっている点によって識別される。しかしすべての動詞と形容詞が重ねることができるというわけではないから、重ねられない動詞と形容詞の識別は意味を頼りにしなければできない。

“旷世＋奇才／伟业／功勋”や“旷世流传／难成”などのコロケーションからは“旷世”が「稀にしかない」とか、「時間が長い」、「悠久」といった意味で、形容詞の品詞性格が判明できたのである。

(8)　绝代（p. 710）㊀

注：これも動詞ではなく、《应汉》p. 679、《规范》p. 725と同じように形容詞とすべきである。

付記：本文日訳にあたり、旧友泉原省二先生と福地桂子先生に大変お世話になりました。記して深謝致します。文章の責任はすべて田にあります。

参考文献

陳剛（1985）《北京方言词典》商務印書館，1990年第 2 次印刷，p. 201“偌個”条，p. 101“軲轆”条
傅民、高艾軍（1986）《北京话词语》北京大学出版社，p. 61
李栄（1997）《哈尔滨方言词典》江蘇教育出版社，p. 59
羅傑瑞（1988）《汉语概说》（張惠英訳）語文出版社，1995年第 1 版，pp. 132–133
羅竹風（2007）《汉语大词典》（縮印本）上海世紀出版有限公司，上海辞書出版社，p. 6473
斉如山（1991）《北京土话》北京燕山出版社，p. 213
任継愈（1981）《宗教词典》上海辞書出版社，p. 1028
田忠魁（2009）「论汉语词重音」『県立広島大学人間文化学部紀要』第 4 号，pp. 139–160
吳汝鈞（1992）《佛教大辞典》商務印書館国際有限公司拠台湾商務印書館股份有限公司第 1 版1994年重印，p. 558
夏征農・陳至立（2009）《辞海》第 6 版，上海辞書出版社，p. 2081
徐世栄（1990）《北京土语辞典》北京出版社，pp. 85, 101, 155, 172
趙元任（1959）《语言问题》台湾大学出版社（本文拠（北京）商務印書館，1980年第 1 版）

p. 87
趙元任（1968）《赵元任全集》第 1 巻，商務印書館，2002年第 1 版，pp. 680–682（英文版原著在美国出版，1980年由丁邦新訳成中文《中国话的文法》先在香港中文大学出版社出版。另有呂叔湘節訳本《汉语口语语法》，単行本1979年由商務印書館在北京出版）
飛田良文（2008）『日本語学研究事典』明治書院，p. 490「仮名文」の項

田忠魁　Tian Zhongkui　黒龍江大学教授　専門：日中言語対照研究